第一席

和敬清寂―私が茶道を学ぶ意味―

就実大学二年（岡山県）
武本　花恋

二〇二〇年四月、私の憧れであり華やかで充実したものとなるはずだった大学生活は新型コロナウイルスと向き合いながら、想像したことのない形で幕を開けた。

前期をどうにか駆け抜けて少し経った九月、私は茶道部の部員となった。きっかけは友達に連れられて行った茶室の訪問だった。元々囲碁を習っているため日本文化への興味関心は強く、茶道も機会があれば習ってみたいとは思いながらもどこか敷居の高さを感じ躊躇していたが、この時訪れた茶室が私と茶道をつなぎ合わせてくれたのだと思う。

入部を決めたのも友達がいること、それ以前から所属していた囲碁部の活動が少ないことが理由だった。「なんとなく楽しそうだから入部するけど、手順も複雑だし、私には向いてないかもしれない」はじまりは決して素敵とはいえない。しかし、お稽古を重ねるごとに茶道は私の心を彩る、かけがえのない存在になっていった。

七月末、新入部員を歓迎するためのお茶会があり、私はそこで点前を担当した。入部してから何度かお茶会の予定はあったが、いずれもコロナの影響で中止になっていたため、部内とはいえ私にとって初めて体験するお茶会であった。釜のお稽古を始めたばかりでお茶会についても知らないことばかりであった私に厳しく教え、時に優しく導いてくださった先生・先輩方・友人の支えもあり、決して完璧ではないがやり遂げることができた。お茶会は参加者全員マスク着用、座る際も距離を取ることを条件に実施した。私はコロナ禍以前のお茶会のことは知らないが、たとえ少々形が変わろうと、何より大切なのはおもてなしの心を大切にすることなのだと実感した。

今なおコロナの影響によって多くの人々がこれまでとは違う、少し不自由な暮らしを余儀なくされている。他の業界に目を向けると飲食店は度重なる営業時間の短縮や休業要請の影響を受け、エンターテインメント業界では無観客での興行やイベントの中止を余儀なくされ、多くの人々が苦しんでいる。

以前こういった言葉を耳にしたことがある。「戦争中、真っ先に切り捨てられたのは文化だった」美術学生やオリンピアンも多く動員され、命を落としたことはよく知られている。昨年、コロナの影響で多くの大会やコンクールが中止に追い込まれた。それは茶道部の活動も例外ではな

く、多くのお茶会が中止になり、人々の交流の場が失われた。

私はよく考える。文化的な活動は「普通」とはいえない状況下では無駄なものとして捉えられるのではないだろうか、と。しかしながら私は茶道が無駄であるとは考えたことはない。むしろ、現在のように誰もが心にゆとりがない状況だからこそ茶道を通じて気付くことがあると思っている。

私は茶道を始めて以降、精神面が成長したと自負している。茶道では細かい手順の数々に加え背筋を伸ばして正座を保ち、また立ち上がる際も独特の動きがあるなど、一見すると煩雑極まりない動作が伴う。背もたれの付いた椅子に腰掛けて作業し、疲れたらベッドに寝そべって過ごす現代人にとって、これらの動きは時に苦しささえ覚えるものだ。しかし、これが千利休が目指した「侘び」の精神であり、そこには苦しい人生を生き抜くという禅宗の思想が影響している。現在はコロナの流行によってさまざまなことに制限が生じ、心のゆとりを失っている人が増えたと感じる。私も例に漏れずその一人だが、週に二回茶室を訪れる時は日常の疲れから解放され、落ち着いた時間を過ごすことができる。茶道を学ぶことで苦しさの中にあっても心にゆとりを持つことができるようになった。

確かに茶道を学ぶこと自体が生きるうえでの不安や恐怖を拭い去ってくれるわけではないし、人生の節目によいことをもたらしてくれるわけでもない。社会が目まぐるしく変化する現代に生きるうえで、我々はどうしても心が休まる場所や精神的な落ち着きを見失いがちだ。その中で充実した人生を送るため、立派な人間として生きるための先駆者となってくれるのが茶道だと考えている。だからこそまだ未熟者な私は今日も茶室に足を運び、お稽古に励むのだ。